

令和 6 年 5 月 2 日現在

機関番号：24302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00267

研究課題名(和文) 転換期における三都の好色本・浮世草子と初代・二代目西村市郎右衛門の「西村本」研究

研究課題名(英文) A study of Ukiyo Zoshi and Koshyokubon in the three capitals during the transition period, and the Nishimura books by Ichiroemon the first and second.

研究代表者

藤原 英城 (FUJIWARA, Hideki)

京都府立大学・文学部・教授

研究者番号：20264749

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、元禄期の上方向好色本の調査および同時期における京都の書肆二代目西村市郎右衛門の出版活動、特に宝永期における浮世草子の出版、京都浮世草子界への参入の動向について調査・研究した。

その結果、これまで所在不明であった好色本『好色つや男』を紹介し、その刊行が元禄前期、遅くとも宝永前期を下限とする上方版であることが明らかとなった。二代目はそうした好色本流行の中、遅くとも元禄11年正月には二代目を継ぎ、宝永期には青木鷺水と連携して浮世草子の出版を行うが、宝永末年には撤退することになる。二代目の浮世草子出版は短期間に終わったが、初代の「西村本」を意識した新「西村本」の試みと評価することができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、西鶴没後(元禄6年)上方で流行していた好色本の様相の一端が明らかとなったが、それは元禄期に「好色文の達人」と称され、西鶴を凌駕するとの評価がなされていた、京都の書肆初代西村市郎右衛門の「西村本」の好色本のあり方や当時の好色本のニーズが奈辺にあったのかを考える上で、文学史のみならず文化史的にも有益な視点をもたらす。

また二代目市郎右衛門が宝永期に新「西村本」とも称すべき浮世草子の出版に着手したが、それが当時の浮世草子界における八文字屋と反八文字屋陣営との覇権争い連携した反八文字屋陣営の動向に追随した活動であったことが明らかとなった。それは出版文化史的にも注目すべきものと言える。

研究成果の概要(英文)： In this study, we investigate the Kamigata Amorous Books of the Genroku period and the publishing activities of the Kyoto-based publisher Nishimura Ichiroemon during the same period, and in particular the publication of Ukiyo Zoshi during the Hoei period.

As a result, we introduced Koshoku Tsuyaotoko, whose whereabouts were unknown, and revealed that it was published in the early Genroku period, or at the latest the upper period of the Hoei period. Ichiroemon took over at the latest in the New Year of the 11th year of Genroku amidst the popularity of such erotic books, and in the Hoei period he collaborated with Rosui Aoki to publish Ukiyo Zoshi, but they withdrew from the book at the end of the Hoei period. It is true that Ukiyo Zoshi Publishing of Ichiroemon was short-lived but it can be evaluated as an attempt at a new Nishimurabon that was conscious of the first generation Nishimurabon.

研究分野：日本近世文学

キーワード：西村市郎右衛門 浮世草子 好色本 西村本 八文字屋本 青木鷺水 北条団水 西沢一風

### 1. 研究開始当初の背景

書肆初代西村市郎右衛門(以下「初代」と記す)による現在確認できる最古の刊行物は、延宝2年〔1674〕頃刊と推測される『増続書籍目録』であり、以後約80部の書物を出版する。寛永期から営利出版が本格化する京都において、延宝期創業と目される初代は新興の書肆と称することができるが、延宝期はそれまで京都がほぼ独占状態にあった出版業に、大坂や江戸の書肆が本格的に参入してくる時期でもあった。

初代は京都の老舗書肆と大坂などの新興勢力に挟まれた形で、自身の経営戦略を立てなければならなかったことが推測されるが、そうした三都出版界の転換期的状況の中で初代が企てたのが一連の「西村本」の刊行であったとみてよい。「西村本」は初代自らが出版、企画した二十数部の仮名草子・浮世草子・好色本をいうが、「西村本」は天和2年〔1682〕刊『新撰咄揃』を嚆矢とし、同3年刊『小夜衣』『新御伽婢子』、貞享2年〔1685〕『宗祇諸国物語』、同3年刊『好色三代男』などを陸続と出版することになる。

そうした「西村本」の中で、特に『宗祇諸国物語』は同年刊『西鶴諸国はなし』との出版経緯に関心が集まり、従来西鶴本との対抗性において「西村本」への言及が主になされてきた。しかしこれまでの「西村本」評価は、「貞享期には大阪の井原西鶴に対抗しようとして『宗祇諸国物語』『好色三代男』など数部の書を刊行するが、仮名草子の要素が強く、力量は西鶴よりはるかに劣っている」(「未達」、雲英末雄執筆『日本古典文学大辞典』、1984)などとされ、総じて文学史的評価は高くない。

しかし、当時における「西村本」には、「都に好色文の達人西村市郎右衛門筆を振ふて西鶴を消す」(都の錦『元禄大平記』元禄15年〔1702〕刊)との評判が見られ、特にその好色本においては西鶴を凌駕する評価がなされていたことは記憶されてよい。端的に言えば、当時における「西村本」、特にその「好色本(浮世草子)」は、今日的評価とは正反対の評価を得ていたことが窺えるのである。もちろん、『元禄大平記』での評価は、作者都の錦の個人的見解が吐露されたものにすぎないかもしれないが、当時の文学および出版文化史的な文脈・環境において「西村本」を再検討する余地は十分にあると言わなければならない。

### 2. 研究の目的

上述したような学術的背景の下、今日的評価とは相違して、当時の人々は「西村本」の何に惹き付けられたのか、「西村本」以前の「好色本(浮世草子)」とは何が違ったのかを、本研究課題の基本的な問題意識として、「西村本」を当時の三都(京・大坂・江戸)の出版界の動向との関連において検討し、初代の書肆としての経営戦略、「西村本」の商品性を解明するとともに、初代を引き継いだ二代目市郎右衛門(以下「二代目」と記す)の新たな「西村本」戦略について考察することを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究では、上記の について具体的に調査・研究を行うことになるが、 においては、そうした二代目の江戸戦略の源流とも言うべき初代における江戸戦略の前提・契機としての上方・江戸版好色本の実態について、その書誌調査、本文分析といった基礎研究を遂行することになる。 については、上述の言わば初代「西村本」戦略が二代目以降どのように継承または変容されて行ったのかを考究することになるが、主として「八文字屋興隆期 - 其碩・一風競争期 - 」(長谷川強『浮世草子の研究』桜楓社、1991・

再版)とされる宝永期の浮世草子界において、二代目の浮世草子を中心とする出版活動を新「西村本」戦略と位置付け、その中核となる浮世草子作者青木鷺水の文学活動を再検討するとともに、二代目と鷺水との接点、なぜ作者「鷺水」であったのかを考察する。

#### 4. 研究成果

本研究期間における研究成果は以下の通りである(いずれも単著)。

(1)「上方版浮世草子『好色つや男』(巻二) - 翻刻と解題 - 」(『京都府立大学学術報告・人文』73号 2021年12月)

(2)「二代目西村市郎右衛門の誕生と宝永期の浮世草子出版」(『國語と國文學』100巻9号 2023年9月)

(1)は研究の目的 に関する成果として挙げられる。

『好色つや男』は野間光辰著『初期浮世草子年表』(青裳堂書店、昭59)に記載されるものの、これまで所在の分からない未調査、未翻刻の作品であったが、京都大学大学院文学研究科図書館に原本を見出し、その調査に着手した。調査結果により、『好色つや男』は上方版であり、刊行は元禄前期、遅くとも宝永前期を下限とすべき好色本であることが明らかとなった。また挿絵は蒔絵師源三郎風であり、西鶴本を手掛けた源三郎の活動を知ることのできる作品でもある。西村本の好色本は西鶴本『好色一代男』『好色二代男』に追随する『好色三代男』などが知られるが、『好色つや男』は同時期の上方において西村以外にもそうした試み(『好色～男』)を行う 作者や書肆のあったことが確認できる貴重な作品である。

(2)は研究の目的 に関する成果として挙げられる。

初代市郎右衛門は元禄9年に没するが、二代目市郎右衛門については、正徳から享保頃にかけて江戸に登場する同名の書肆西村市郎右衛門が二代目として京都に戻ったとする見解がある一方で、元禄8年3月に京都に登場する西村九左衛門が二代目を引き継いだとの見解があり、これまで定説はなかった。本研究において、西村九左衛門が初代の没後間もない元禄9・10年中、遅くとも11年正月には二代目を襲名したことが明らかとなるとともに、その二代目となった九左衛門が正徳頃に江戸に登場する西村市郎右衛門と同一人物であることが明らかとなった。

二代目市郎右衛門は宝永期(1704~11)に入って初めて浮世草子の出版に着手するが、それは「其磧・一風競争期」における反八文字屋勢力の動向と連携する活動と位置付けられる。二代目は宝永2年5月に『御前独狂言』を出版し、浮世草子出版に本格的に参入するが、作品コンセプトとしては「好色」ではなく「風流」「御前」を前面に打ち出す。そうした二代目の戦術は、初代の好色本路線に対する新「西村本」の表徴と言えるが、それは西沢一風の作品に追随するものであった。宝永4年8月刊の『初音物語』を嚆矢として『新玉櫛笥』(宝永6年8月刊)、『吉日鎧曾我』(同7年3月刊)と青木鷺水の作品を出版し、二代目は鷺水に特化した浮世草子戦略を実行する。鷺水は北条団水と密接な関係が確認できるが、団水は一風と連携した反八文字屋勢力のフィクサー的存在であり、二代目による鷺水の要員化には団水の関与が予想される。

宝永末年に団水の死去とともに反八文字屋陣営が敗北する。二代目市郎右衛門の浮世草子出版も時を同じくして沙汰止みとなり頓挫することとなった。

## 今後の展望

本研究課題による西鶴本以外の上方版好色本の研究成果は、「西村本」研究のみならず、元禄期にひとつのピークを迎えることになる好色本流行現象の文学・出版文化的分析にも有効な基礎研究となるが、さらに継続的に「西村本」好色本が転換期を迎える元禄期の上方版好色本のあり方を明らかにするとともに、江戸版好色本も含めた未翻刻本を中心とする書誌・本文研究が必要となる。

また二代目市郎右衛門は正徳期以降に江戸進出を企てるが、それは宝永期における浮世草子界への進出、新「西村本」の企ての挫折を否定的契機としていたことが予想される。しかし、こうしたネガティブな要因を背景としながらも、それは結果的に新たな市場としての江戸に着目させる契機ともなり、江戸店西村源六店の開店、さらに江戸本屋仲間の結成に深く関与することになることが推測され、今後さらなる考究が求められよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 藤原英城	4. 巻 100-9
2. 論文標題 二代目西村市郎右衛門の誕生と宝永期の浮世草子出版	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 國語と國文學	6. 最初と最後の頁 3-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原英城	4. 巻 73
2. 論文標題 上方版浮世草子『好色つや男』（巻二） ー翻刻と解題ー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都府立大学学術報告 人文	6. 最初と最後の頁 101-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------